

北の海鳥 二十一号

『北の海鳥』二十一号
令和7年10月29日
北海道海鳥保全研究会
札幌市西区発寒7条14-8-2



ウミスズメ 2024年4月24日 日高沖 大町 正弘

目次

1. 北海道の海鳥生態		
・ダムの堤体に集まって換羽するオオセグロカモメ	三上 かつら 三上 修	2
2. 北海道沖の海鳥		
・八戸-苫小牧航路におけるシロハラトウゾクカモメ多数の観察記録	森田 佑介	6
3. 北海道の海鳥観察記録		
・日高町シノダイ岬でウミスズメ1400羽の渡りを観察	大町 正弘	9
・根室海峡におけるカナダカモメ <i>Larus glaucoides thayeri</i> の観察記録	品田 済	11
・初山別の海鳥2 ～ミツユビカモメの春の渡り～	矢萩 樹	16
・天塩町振老沼 ハジロクロハラアジサシとの出会い	山下 政俊	19
・豊富町にハジロクロハラアジサシ	川崎 正大	21
・道北日本海側におけるクロハラアジサシ・ハジロクロハラアジサシの観察記録	長谷部 真	23

1. 北海道の海鳥生態

ダムのかげに集まって換羽する
オオセグロカモメ三上かつら (バードリサーチ)
三上修 (北海道教育大学函館校)

鳥類にとって、換羽は非常に重要です (reviewed in Kjellén 1994, Howell 2010)。傷んだり外部寄生虫がくっついてきた古い羽をまとったままでは生存力にかかわります。羽衣の見た目が性選択に関わる種の場合には、配偶者獲得にも影響をします。そのため、鳥類にとって、換羽を問題なく成功させるかは重要です。特に、換羽をするためにはまず新しい羽をつくるための多量の代謝エネルギーが必要ですし、羽が抜け落ちた状態では飛行能力や保温あるいは断熱性が低下します。そのため、換羽期の鳥たちは、捕食されやすい場所を避けてより隠れたり逃げたりしやすい場所を選んだり (e.g. Tsurim et al. 2010, Sorais et al. 2022)、余計な代謝コストを抑えたりする (e.g. Moreno - Rueda 2010) と考えられています。

今回、オオセグロカモメ *Larus schistisagus* が換羽期において、内陸にあるダムの堤体に日中に集まって過ごしていたのを観察したので報告をします。これは、2024年4月から2025年3月までの間、函館市内にある複数の都市緑地や公園において鳥との遭遇率を毎月調査していたなかでの観察事例です。

鳥類が休息をしたり、採食をしたり、巣をつくる場所として、人工構造物を利用することが知られています (例として三上 2019 など)。それはカモメ類においても当てはまり、特に近年、国内外において人工構造物を利用した営巣が確認されています (松丸・渡辺 2011, 松丸 2012, 長谷

部 2013, 矢萩 2016, 三上 2022, 三上・三上 2022 など)。しかし、換羽期に海岸から離れた山際にあるダム湖までわざわざやってきて、多数の個体があつまって換羽しつつ休んでいるというのは興味深い行動といえます。このような人工構造物を利用するとすれば、そこには何らかの理由があると考えられます。本稿ではこの観察事例を紹介し、今後の類似事例の報告や研究のきっかけとなることを期待したいと考えます。

場所は函館市陣川町の笹流ダム (N41.8385127763903, E140.781476293156) です。亀田川水系笹流川に位置し、ダム堤体の下流側には前庭広場 (公園)、上流側には湛水面積 7ha の笹流貯水池 (いわゆるダム湖、面積は [ダム便覧 オンライン](#) より引用) があります。ダム湖周辺は山林です。調査は月に1回、午前中 (0830-1130 の間) の任意の1時間、歩き回って鳥を発見した場合はその種と個体数を記録しました。一般的なセンサスと異なり、観察範囲は厳密に決めませんでしたが、ここはすり鉢状の地形であることから、毎月同程度の範囲を見たことになります。

調査期間中、オオセグロカモメは 4、5 月には確認されず、6 月以降に観察されました。6 月 19 日に 13 羽、7 月 19 日に 30 羽、8 月 21 日に 174 羽、9 月 10 日に 13 羽が調査地内で確認されました (図 1)。6 月と 7 月に観察されたオオセグロカモメはすべて決定羽の成鳥で、上空を飛翔しているもの、ダム湖の湖面に浮かんでいるもの、およびダム堤体に並んでとまっているもの (図 2) が観察され、特に 7 月と 8 月は後者 2 つが多く見られました。8 月には 174 羽のうち 100 羽程度はダム湖の水面に浮かんでおり、ほとんどは成鳥でしたが、若い (4th summer 未満の) 個

体、もしくは当年生まれと思われる、茶色い羽が混じる個体も同じ場所にいました（正確な内訳は記録なし）。9月、飛来総数は減ったものの、若い個体が多くなり（正確な内訳は記録なし）、多くは湖面に浮いていました。10月、11月に観察された個体は湖面に浮かんでいたのが1羽、上空通過が2羽であり、11月の1羽は上空通過のみでした。

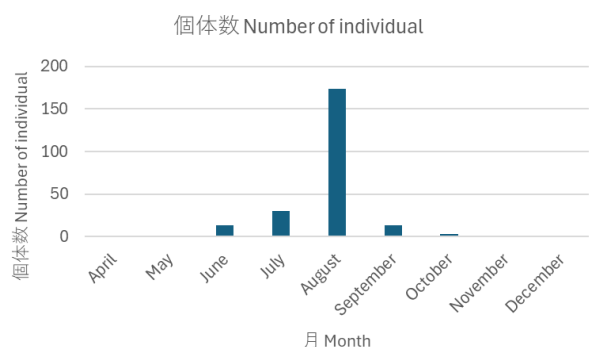


図1. 笹流ダムで2024年4月から12月までの間に確認されたオオセグロカモメの個体数。



図2. ダム堤体にとまっているオオセグロカモメ（2024年7月19日）。

7月の観察時には、堤体にとまっていた

オオセグロカモメらは、ときおり自分の体をくちばしで掻いたり自分の羽毛をくちばしで抜いたりしていました。堤体上には、たくさんの羽が落ちていて、糞も付着していました（図3）。調査時にダム管理の関係者がバケツと箒を持ってきたところとすれ違ったこともあるので、気にされているのだと思います。8月にも堤体には羽と糞がたくさん落ちていました。

また、本調査以外でも著者のひとりである三上（O）と三上研究室の学生らが7月11日に同地へ観察に訪れており、この時にもすでにオオセグロカモメの羽が下に落ちていたことがわかっています。

今回の本調査地におけるオオセグロカモメの羽の脱落量は7、8月がピークで、脱落していた羽毛の大部分が体羽でした。オオセグロカモメの成鳥における冬羽への換羽時期は5月から始まり、Olsen & Larsson（2010）によれば、風切がすべて置き換わるのは11月までかかり、頭部は7月から、雨覆や尾羽の換羽は8-9月、とあります、今回の事例が示す換羽フェノロジーはこれと合致します。

笹流ダムの堤体は、海岸線からの最短距離が約6kmあり、河口から川沿いにさかのぼると約8km上流に位置しています。笹流で換羽していたオオセグロカモメがどこで繁殖している個体なのかは不明です。ただし、函館市や北斗市にあるビルの屋上や、海岸部で繁殖をしているものの可能性があります。また、函館の周辺の岩礁に1ペア単位で繁殖しているものもいます。ですが、利尻島で繁殖するオオセグロカモメでは繁殖地から1日に100kmを超える採餌トリップを行う例（Mikami et al. 2022）があることを考えると、函館の付近の海岸のどこで繁殖をしていたとしても、本種にとって移動自体は十分に可能な範囲と考えられます。



図3. ダム堤体のコンクリートがオオセグロカモメの羽毛や糞(a)で汚れていた（いずれも2024年7月19日）。なかには風切羽もしくは尾羽と思われるもの(b, c)も落ちていた。

しかし、山際にあるダム湖までわざわざやってきて、多数の個体があつまって換羽しつつ休んでいるというのは興味深い行動といえます。ダムの堤体は、海岸の堤防と同じく、捕食者を発見しやすく、必要であれば、飛んだり水面に逃げたりすることができます。実際、堤体にパーチしていたオオセグロカモメ達は、林のなかの坂道をのぼってきた私が堤体までたどりついたとたん（おそらく彼らから私が見えてすぐに）、次から次へ湖面へと移動しました、くわえて、真水を得られること、おそらく気温が海岸堤防よりは低いといった利点があることが考えられます。なお、真水の利用については、函館湾にはいくつもの河川がそそいでおり、オオセグロカモメが、本河川も含むそれらの河川の下～中流域で休息している様子も見られます。そのため、真水の

利用だけでは説明できません。

前述したように、換羽には生理的な負担が大きいのでなるべくストレスがかからない場所が望ましく、かつ飛翔能力が低下していることで、捕食者や人間の攪乱など危険から逃げやすい条件を備えた場所として、今回の場所を選択していることが考えられます。ただし、換羽とは全く無関係に、この時期にだけ得られる食糧を確保するために集まった可能性も、完全には否定できません。

季節の進行にともない、次第に個体数が増えたということ（図1）、かつ、幼羽をまとった個体は7月には確認されなかったものの8月、9月には一定数みられたことは、他個体のもつ「場所の情報」を真似た個体がいた可能性を示しています。

このように、今回のオオセグロカモメの行動は、行動生態学的あるいは生理生態学的な興味の対象となりうる一方で、ダム管理者の側からは、衛生上の問題としての懸念が生じる可能性もあり、今後注目していくべきと考えます。

なお、本研究は南北海道学術振興財団より助成を受けて実施しました。

引用文献

- 長谷部真 2013. 北海道北西部におけるオオセグロカモメが繁殖する海岸沿いの屋根の特徴と巣の位置. *Bird Research* 9: S13-S18.
- Howell SN. 2010. Molt in north American birds. Houghton Mifflin Harcourt.
- Kjellén N 1994. Molt in relation to migration in birds- a review. *Ornis Svecica* 4: 1-24.
- 松丸一郎・渡辺浩 2011. 隣接するビルの屋上に集団を形成した東京不忍池のウミネコ. *Urban Birds* 28: 27-44.
- 松丸一郎 2012. ビルの屋上から池の中の島に営巣地を移動した東京不忍池のウミネコ. *Urban Birds* 29: 8-21.
- 三上かつら 2022. 青森県今別町の消波ブロックで営巣したウミネコ. *北の海鳥* 15:16
- 三上かつら・三上修 2022. 江差港湾内の養殖いかだで繁殖するウミネコとオオセグロカモメ *北の海鳥* 15:14
- 三上修 2019. 鳥類による人工構造物への営巣: 日本における事例とその展望. *日本鳥学会誌*. 68(1), 1-18.
- Mikami K., Kazama K, Kazama MT & Watanuki Y 2022. Mapping the collision risk between two gull species and offshore wind turbines: Modelling and validation. *Journal of Environmental Management*, 316, 115220.
- Moreno - Rueda, G. 2010. Experimental test of a trade - off between moult and immune response in house sparrows *Passer domesticus*. *Journal of Evolutionary Biology*, 23(10), 2229-2237.
- Olsen HI & Larsson H 2010. Gulls of Europe, Asia and North America. Chapter 24 Slaty-backed Gull - *Larus schistisagus*., Helm, London. (電子書籍)
- Sorais M, Patenaude - Monette M, Sharp C, Askren R, LaRocque A, Leblon B & Giroux JF. 2023. Migration patterns and habitat use by molt migrant temperate - breeding Canada geese in James Bay, Canada. *Wildlife Biology*, 2023(1), e01062.
- Tsurim I, Kotler, BP, Gilad A, Elazary S & Abramsky Z 2010. Foraging behavior of an urban bird species: molt gaps, distance to shelter, and predation risk. *Ecology*, 91(1), 233-241.
- 矢萩樹 2016. 釧路市の港におけるオオセグロカモメの営巣状況. *釧路市立博物館紀要* 36: 31-34.

2. 北海道沖の海鳥

・八戸-苫小牧航路における
シロハラトウゾクカモメ多数の観察記録
森田 佑介

シロハラトウゾクカモメ（以後、シロトウと呼称）はトウゾクカモメ属の1種で、基亜種 *Longicaudus* と *Pallescens* の2亜種が知られています。日本国内においては旅鳥として、亜種 *Pallescens* が北海道から東日本、小笠原諸島にかけての太平洋上に渡来し、春に多いとされています（千嶋 2018；箕輪 2020；日本鳥学会 2024）。本種の観察記録は様々な図鑑や目録から Web 上の個人の記録まで膨大に存在しますが、春季の日本近海を通過する個体数やその変動、渡りのピークといった動向の詳細についてはほとんど知られていないようです。

本記録は、2025年5月10日に八戸発・苫小牧行の航路（以後、「八苫航路」と記載）にて、1日に300羽以上の極めて多数のシロトウを観察した記録をまとめたものです。日本近海において1度に100羽以上のシロトウが観察されたことはこれまであまりなく、皆様が航路観察に出かける際や本種の春季の動向を考えるうえで役に立つこともあるかと思い、この場をお借りして報告させていただきます。

さて、今年も4月に入ってから、本土と伊豆諸島を結ぶ八丈航路での情報を皮切りに、まもなく八苫航路での観察報告が X（旧 Twitter）等の SNS でも目につくようになりました。2024年、八苫航路で多数のシロトウを観察した友人達が羨ましかった私は、仕事のスケジュールと気象予報サイトの windy（windy.com）の天気予報を睨めっこしながら乗船するタイミングを待ち続けていました。観察前日の5月9

日及び観察当日の5月10日の北日本太平洋側の天候は、低気圧の影響で関東以北の海上は東から南寄りの15m前後の強風が吹き荒れ、波高も4m前後とかなりの荒れ模様が見込める予報でした。都合よく仕事も休みだった私は、シロトウが渡りのピークに入っていそうな時期であること、春季は主に東日本沿岸部の海上を北上して繁殖地のロシア極東地域を目指すため、東～南寄りの強風であれば追い風に加えて沿岸部に吹き寄せられる形になることで、より多数のシロトウと遭遇しやすい条件になるのではないかと予想し、件の友人達と乗船しました。



写真1 飛翔するシロハラトウゾクカモメ

観察当日10日の天候は概ね予報通りで、八戸出港時から津軽海峡までの風況は南南東11～18m、波高は4m前後、天候は曇時々雨でした。フェリーが無事に運航するか不安な天候状況だったので、定刻通りの出航には安堵しました。波高はあれど視界は2kmほどと望外によく、風向きも船尾方向からだったことで波飛沫も少なく、観察条件は意外なほど悪くありませんでした。シロトウは八戸沖からすぐに出現しました（写真1）。出現海域は八戸沖から苫小牧沖までの航路上のほぼ全域に及びましたが、その約9割は津軽海峡以南の青森県沖に集中しており、津軽海峡以北の北海道沖（恵山、室蘭、苫小牧沖）とは大きな差がありました。特に個体数が多かったのは、青森

県の小川原湖東沖，六ヶ所村沖，尻屋崎沖の 3 ヶ所で，いずれも 10～30 羽前後の小群やそれらの小群から形成された集団を観察できました．このうち圧巻だったのは六ヶ所村沖と尻屋崎沖で，六ヶ所村沖で一度に 45 羽の群れが眼前を横切ったときは，思わず写真を撮るのも忘れて見入ってしまいました（写真 2）．尻屋崎沖では，数羽～10 羽前後の小群が緩く連なって形成された「シロハラトウゾクカモメの川」が見られ，双眼鏡の視野を埋め尽くす光景には圧倒されました（写真 3）．シロトウの多くは陸地側の西から沖合の東方向へ戻る動きが目立ちましたが，六ヶ所村沖付近では海面で採餌する個体や降りて休んでいる個体も散見されました．津軽海峡を越えて，

白老南東沖から風向が北東に変わって海況が穏やかになると個体数は大きく減少し，以降は散発的に単独～数羽が出現するのみでした．最後の個体が出現したのは苫小牧沖から南に 25km ほどの地点で，最終的な観察個体数は 365 羽を数えました．カウントに際しては，いずれも確実にシロトウと判断できる個体，そして洋上に面的に出現するために船から約 2km 以内の範囲に限定して数えましたが，しばしば判別が困難な遠方もシロトウと思わしき鳥が飛び様子が見られ，実際にはもっと多くの個体がいたものと思われました．なお，年齢構成については見られた個体のほとんどは成鳥で，若鳥は第 2 回夏羽及び第 2 回～第 3 回夏羽を数羽観察したのみでした．



写真 2 六ヶ所村沖で眼前を通過した 45 羽の群れの一部（大町正弘氏撮影）



写真 3 シロハラトウゾクカモメの集団（大町正弘氏撮影）

今回これだけ多数のシロトウを観察できた要因としては、まずは渡りのピークに当たったことが大きいと思われます。日本国内における本種の渡りの動向について言及された資料を私は見出せませんでした。Web上やSNS上の個人の観察情報を収集する限りでは、八苦航路の海域では4月下旬～5月下旬に観察記録のほとんどが集中しているため、観察日前後はちょうど適期だったと言えそうです。加えて風況が東から南寄りの強風だった条件が大きく寄与し、伊豆諸島方面から本州沿岸部を北上中の個体のほか、より外洋を移動していた個体も沿岸に吹き寄せられる形になったことで、結果的に多数と遭遇できたのだろうと考えています。なお、この日私と一緒に観察した大町氏・小野氏・青柳氏の3人の友人達は、昨年4月29日にも八苦航路にて124羽と多数のシロトウを観察しています。当時は風に近い穏やかな天候で、出現のピークは津軽海峡以北の恵山沖だったそうです。今回と観察条件や出現海域のピークこそ異なりますが、世界三大漁場の一つ

で餌資源が豊富な三陸沖から日高沖にかけては、従来知られていた以上に多数のシロトウが渡り途中に滞留する重要な海域なのかもしれません。人知れず毎年見られる光景だったのか、それとも海水温の上昇や今春まで続いた黒潮大蛇行の影響があったのか、はたまたシロトウもハジロミズナギドリのように増加傾向にあるのか分かりませんが、また来春も自分の目で確かめに行こうと楽しみにしています。

最後になりますが、報告する機会と臨場感溢れる写真を提供して頂いた大町氏、現地で一緒に観察した小野氏と青柳氏、査読及びご助言を頂いた事務局の先崎氏と長谷部氏にお礼申し上げます。

参考文献

- 箕輪義隆・小田谷嘉弥,2020 新 海鳥ハンドブック
- 日本鳥学会,2024 日本鳥類目録改訂第8版
- 千嶋淳,2018 北海道の海鳥5 トウゾクカモメ類・アジサシ類

3. 北海道の海鳥観察記録

日高町シノダイ岬でウミスズメ 1400羽の渡りを観察 大町 正弘

2024年4月24日に北海道日高町のシノダイ岬にてウミスズメ1400羽の渡りを観察したので報告します。ウミスズメ (*Synthliboramphus antiquus*) は日本で絶滅危惧ⅠA類 (CR) に選定されている全長26cmほどの海鳥です。

観察したシノダイ岬は沙流川と日高門別川の間にある太平洋に面した標高3mの小さな岬です。海岸から海鳥の渡りを車内から観察できる場所を探していたところ、この岬を発見しました。何度か通ううちに春、南東の強風が吹いたときは海鳥が岬に近づき観察しやすいことが分かりました。

この日は午前6時50分から午前8時30分の1時間40分観察を行いました。観察時の風況は午前6時に東南東の風7.8 m/s、午前9時に南東の風9.5 m/s (earth.nullschool.net) でした。

現地に到着し15倍の防振双眼鏡で車内から沖を観察するとウミスズメの群れが西から東へ向かって渡っていくのが見られました。1羽から30羽ほどの群れが次々と流れていきます。ウミスズメと判る数だけカウントしたところ約1400羽を数えることができました。識別できない遠い沖でもウミスズメと思われる群れが流れていました。

仕事先へ移動の時間が来てしまい、後ろ髪をひかれる思いで現地を後にしました。夕方、仕事終わりに再度シノダイ岬へ寄ってみると識別できる距離でウミスズメの渡りは確認できず。遠い沖に朝よりも数はだいぶ少ないですがウミスズメ類が渡っているのを確認できました。また水面に浮いて

いる少数のウミスズメの群れが観察できました。



写真1 ウミスズメ飛翔

この日はハシジロアビ1羽を含むアビ類、トウゾクカモメの群れ、ハイイロミズナギドリと思われる無数の暗色ミズナギドリ類、ウミウ、カワウ、アカエリカイツブリ、ミツユビカモメやユリカモメなどのカモメ類の渡りも確認できました。4月22日の夜から北海道襟裳以西の太平洋沖で南東の風が吹き始め、4月24日朝に風が強まり普段沖を渡っている海鳥が沿岸まで風に押されてきたようです。



写真2 着水前

「北海道の海鳥1 ウミスズメ類①」(千嶋2013)のウミスズメは「夏羽は喉と後頸から側胸の広範囲が黒色で、目の上から後方に向かって白い飾り羽が伸びる」、「冬羽は目後方への白い羽はなくな

り、頭部の白色部は広がって喉の下部や目の後方へ達する」との記載を参照し写真が撮れた83羽を識別したところ夏羽、ほぼ夏羽の個体（喉は黒色だが目後方の白い飾り羽が不明瞭）は56羽（67%）でし

た。冬羽、ほぼ冬羽の個体（喉の黒色が不明瞭）は27羽（33%）でした。

私は渡りをしている鳥を観察するのが一番好きでこの日は忘れられない日となりました。



根室海峡におけるカナダカモメ
Larus glaucooides thayeri の観察記録
品田 済

はじめに

私は 2022 年 4 月から標津町の職場へと配属になり、趣味の鳥見に勤しんでき

ました。配属以降の3年間根室地区（根室半島および標津町，別海町）のカモメ類を観察し（図1），各種の渡来状況が徐々に分かってきました。そこで，今回は日本では数少ない冬鳥とされているアイスランドカモメ *L. glaucoides* の亜種カナダカモメ *L. g. thayeri* の根室地区への渡来状況について報告いたします。



図1 観察エリアと主要な観察地点

私が初めて根室地区でカナダカモメを観察したのは2023年1月です。その後、根室地区へのカナダカモメの飛来状況に興味を持ち探索時間を増やした結果、2025年4月までに根室の鳥見仲間の観察した個体と合わせて46個体のカナダカモメを観察しました。カナダカモメは初列風切羽の黒色部や顔の褐色斑、光彩の色などの特徴について個体差が大きく、これらの点について総合的に判断することで個体識別が出来ると考え、全ての特徴について一致する場合は同一個体、そうでない場合は別個体として集計しまし

た。また、カナダカモメと類似する、シロカモメと他種との雑種やアメリカセグロカモメとは、大きさ、体型、脚の長さ・太さ、外側初列風切上面のパターン等の形態に加えて、眼瞼輪(がんけんりん)の色に着目して識別しました。具体的には、大きさがより小さく、華奢で、脚が短く、外側初列風切の各羽の上面は内弁が先端まで淡色のストライプ状のパターンとなり、眼瞼輪(がんけんりん)が紫色またはピンク色の個体をカナダカモメとしました。

表 1 に 2023 年 1 月から 2025 年 4

月までに個体識別が可能な画像が撮影された全個体の観察日と観察場所をまとめました。探索頻度は年と時期により異なる

るので、観察個体数の時期・年変動は必ずしも実態に即しているとは限らないことは留意頂けると幸いです。

表 1. 根室地区におけるカナダカモメの記録

シーズン	No.	年齢	観察日	観察場所	備考
2022秋-2023春	1	成鳥	2023/1/14	尾岱沼漁港	
	2	成鳥	3/25.27	走古丹	
	3	成鳥	4/9.14	春別川河口, 尾岱沼漁港	
	4	成鳥	4/16	標津漁港	
	5	成鳥	4/16	春別川河口	
	6	第三回夏羽	4/17.18.27	標津川河口漁港	4/16に湧別漁港で撮影された
	7	成鳥	4/22	標津漁港	
2023秋-2024春	8	第二回冬羽	2023/11/18.26	落石漁港	
	9	成鳥	11/24	標津川河口	
	10	成鳥	11/24	標津川河口	
	11	成鳥	12/23	尾岱沼漁港	
	12	成鳥	2024/2/4	春別川河口	
	13	成鳥	3/31	春国岱	
	14	成鳥	4/9	春別川河口	
	15	成鳥	4/20	別海漁港	
2024秋-2025春	16	成鳥	4/25	別海漁港	
	17	成鳥	2024/11/9	標津川河口	
	18	成鳥	11/9	標津川河口	No. 10と推定同一個体
	19	成鳥	11/13	標津川河口	
	20	成鳥	11/15.16	本別海, 別海漁港	
	21	成鳥	11/15	標津川河口	
	22	成鳥	11/13.27 2025/2/11.14	標津川河口, 尾岱沼漁港, 齒舞漁港	
	23	成鳥	11/26 12/20.22	根室漁港, 尾岱沼漁港	亜種 <i>kumlienii</i> の可能性あり
	24	成鳥	12/15.22 2/19.20.23.25 3/15	尾岱沼漁港	
	25	成鳥	12/15 2/13	尾岱沼漁港	
	26	成鳥	12/20.28 2/13	尾岱沼漁港	
	27	成鳥	12/20	尾岱沼漁港	
	28	成鳥	12/20.21.22	尾岱沼漁港	
	29	成鳥	12/20	尾岱沼漁港	
	30	成鳥	12/22	尾岱沼漁港	
	31	成鳥	12/22	尾岱沼漁港	
	32	成鳥	12/23 2/9.11.13.19	尾岱沼漁港	
	33	成鳥	12/24.25 2/15.25	尾岱沼漁港	
	34	成鳥	12/25	尾岱沼漁港	
	35	成鳥	12/25.28	尾岱沼漁港	
	36	成鳥	2/8	齒舞漁港	
	37	成鳥	2/13 3/1	尾岱沼漁港	
	38	成鳥	2/15	瑤瑤漁港	
	39	成鳥	3/7	尾岱沼漁港	
	40	成鳥	3/7	尾岱沼漁港	
	41	成鳥	3/14	走古丹漁港	
	42	成鳥	3/14	尾岱沼漁港	
	43	成鳥	3/16.22 4/12	尾岱沼漁港, 別海漁港	
	44	成鳥	3/22	尾岱沼漁港	
	45	成鳥	4/16	走古丹漁港	
	46	成鳥	4/29	別海漁港	

見つかりやすい場所とその季節変化
次に、根室地区におけるカナダカモメ

の季節ごとの観察場所と観察しやすさについて見ていきます。まず、根室地区で

は季節ごとにカモメ類が良く集まるポイントが変遷し、カナダカモメが見つかりやすいポイントも季節によって異なります。カナダカモメは11月に入ると個体数が増加します。シーズン序盤のこの時期は標津川河口で最もよく見つかり、11月に観察された10個体のうち7個体がこの場所で観察されました。

12月から3月中旬は野付半島周辺（尾岱沼漁港、春別川河口）で最も見つかりやすい印象を受けました。特に2024年12月は尾岱沼漁港で連日2～5個体のカナダカモメが観察されました。この場所のカナダカモメは、特に日の入り前後に多く見られました。野付半島周辺以外では、2025年2月に歯舞周辺（歯舞漁港、瑤瑤（ごようまい）漁港）で2個体のカナダカモメが観察されました。1月はカナダカモメの観察記録が少ないのですが、これは年末年始休みで漁業が行われない期間が1週間ほどあるため、漁港周辺に滞在するカモメ類が減少することと関係しているのではないかと考えています。

3月下旬になると、風蓮湖周辺（走古丹、春国岱）や春別川河口、尾岱沼漁港、別海漁港、標津漁港などの広い範囲でカナダカモメを観察することができました。特に見つかりやすい条件は、降雨を伴うやや強い北風の日で、このような条件の日により上記のポイントを探し回ると高確率でカナダカモメが見つかりました。この時期の根室地区で見つかるカナダカモメには、頭部の換羽が進み、頭が白い個体が混ざります（写真1）。これまでで最も遅く観察されたのは2025年4月29日の別海漁港でした。

印象的な個体の記録について

3年間の記録の中で、個体識別により同一個体の移動情報が分かった例がいくつかあります。今回は特に移動が大きかった2例をご紹介します。



写真1. 4月に見られた換羽が進んだカナダカモメ（上からNo.3, 7, 16）

1つ目がNo.6の第三回夏羽です（写真2）。2023年4月16日に根室の鳥見仲間がオホーツク海沿いの湧別漁港に訪れた際に偶然見つけて撮影した個体で、同4月17日に標津漁港で再発見され、その後11日間、断続的に標津漁港で観察されました。この2地点で観察された個体は嘴の黒斑の形が一致する点、外側初列風切先端の白斑の形が一致する点から同一個体と判断しました。湧別漁港は標津漁港から直線距離で150km以上の距離があり、また、最短距離を渡るためには知床半島の山々を越える必要があります。どのような経路で湧別漁港から標津漁港にたどり着いたのか非常に興味深い記録となりました。



写真2. 湧別漁港（上）で撮影された翌日に標津漁港（下）で撮影された第三回夏羽（No.6）

2つ目はNo.22の成鳥です（写真3）。この個体は、2024年11月に標津漁港で観察され、2025年2月11日に尾岱沼漁港で再発見されました。さらに、その3日後の2月14日には、歯舞漁港でも観察されました。本事例から11月から2月の厳冬期に根室地区の沿岸を移動する個体がいることが分かりました。

他にも、2024-2025年冬シーズンは数個体が根室地区で複数回観察されており、記憶に残るシーズンとなりました。そのうち1羽については（No.23）、初列風切の黒色部が狭く、アイスランドカモメの亜種 *kumlieni* と言ってよさそうな個体でした（写真4）。



写真3. 尾岱沼漁港（上）で撮影された3日後に歯舞漁港（下）で撮影された成鳥（No.22）



写真4. 亜種 *kumlieni* とみられる個体（No.23）

おわりに

北海道海鳥保全研究会

標津に来るまでは、根室地区でここまで多くのカナダカモメを観察出来るとは思っていませんでした。特に 2024 年秋-2025 年春の野付湾周辺は非常に多くのカナダカモメが見られ、とても驚きました。全国的にカナダカモメの記録は多くなく、ネットで検索をして出てくる写真のほとんどが銚子で観察されたもので、偶に北海道で撮影された写真が混ざる程度です。いちカナダカモメ好きとして、この記事の参考にして今後カモメウォッチャーが増えて日本のカナダカモメ事情がより一層解明されていく事に期待した

いです。

また、近年は銚子のカナダカモメの数が減少している事が指摘されており、特にここ数シーズンは若い個体が少ないという話題を耳にします。若い個体が少ない傾向は根室地区でも同様に見られ、3年間で観察された 46 個体の内、第一回冬羽/夏羽は 1 羽も観察されませんでした。これは一時的なものなのか、今後国内のカナダカモメの飛来が減少する予兆なのか、注視しながら今後もカモメを見続けたいと考えています。



写真 5. 根室管内で観察されたカナダカモメ（左上から順に表 1 の No.1~46 に対応）

初山別の海鳥2

～ミツユビカモメの春の渡り～
矢萩 樹（当会広報）

はじめに

北の海鳥 19号では初山別村における海鳥の生息状況として、陸上からの観察によるケイマフリの春の渡りについて報告しました（矢萩 2024）。今回は、同じ方法によって観察したミツユビカモメの春の渡り

についてご紹介したいと思います。

陸上から海鳥を観察する楽しみはいくつかありますが、外洋性の海鳥を観察することもその一つです。カモメ類の中では比較的外洋性の生態を持つミツユビカモメを観察した時には、普通種でありながらも嬉しさがこみ上げます。また、ミツユビカモメの個体数が多い時期には、本種を追いかけて飛来するトウゾクカモメ類の観察も期待され、そのような想像にも胸が膨らみます。

表 1. ミツユビカモメの確認状況

日付	観察時間			個体数	30分あたり換算値	日付	観察時間			個体数	30分あたり換算値
	開始	終了	総時間数				開始	終了	総時間数		
2024/1/21	9:00	10:00	1:00	0	0.0	2024/4/1	6:10	7:00	0:50	3	1.8
2024/1/28	9:30	10:00	0:30	0	0.0	2024/4/2	6:00	7:00	1:00	112	56.0
2024/2/3	10:00	11:00	1:00	0	0.0	2024/4/3	6:00	7:00	1:00	14	7.0
2024/2/7	7:00	7:30	0:30	0	0.0	2024/4/5	5:40	6:40	1:00	351	175.5
2024/2/8	6:50	7:30	0:40	0	0.0	2024/4/6	5:30	6:30	1:00	1055	527.5
2024/2/10	7:30	9:30	2:00	0	0.0	2024/4/7	5:40	6:40	1:00	1510	755.0
2024/2/11	7:00	9:30	2:30	0	0.0	2024/4/9	5:50	6:50	1:00	16	8.0
2024/2/12	7:20	9:30	2:10	0	0.0	2024/4/10	6:10	7:10	1:00	0	0.0
2024/2/22	6:35	7:25	0:50	0	0.0	2024/4/11	6:00	7:00	1:00	554	277.0
2024/2/24	8:30	11:30	3:00	0	0.0	2024/4/13	6:10	7:10	1:00	0	0.0
2024/2/25	9:00	11:30	2:30	0	0.0	2024/4/16	6:20	6:50	0:30	2	2.0
2024/2/28	6:30	7:30	1:00	0	0.0	2024/4/18	6:20	6:50	0:30	0	0.0
2024/2/29	6:30	7:30	1:00	0	0.0	2024/4/19	6:00	6:30	0:30	0	0.0
2024/3/2	14:30	16:45	2:15	300	66.7	2024/4/20	6:00	6:30	0:30	0	0.0
2024/3/6	6:30	7:00	0:30	0	0.0	2024/4/24	6:00	7:00	1:00	0	0.0
2024/3/7	6:30	7:30	1:00	0	0.0	2024/4/27	5:00	6:00	1:00	0	0.0
2024/3/8	6:30	7:30	1:00	0	0.0	2024/4/28	5:00	7:00	2:00	2	0.5
2024/3/14	6:20	7:20	1:00	230	115.0	2024/4/29	5:20	6:20	1:00	0	0.0
2024/3/15	6:20	7:20	1:00	0	0.0	2024/5/1	5:20	6:20	1:00	0	0.0
2024/3/16	8:00	11:30	3:30	0	0.0	2024/5/2	5:45	6:45	1:00	0	0.0
2024/3/17	6:20	9:30	3:10	0	0.0	2024/5/10	5:50	6:50	1:00	1	0.5
2024/3/19	6:15	7:15	1:00	0	0.0	2024/5/12	4:45	5:45	1:00	9	4.5
2024/3/20	9:20	11:20	2:00	0	0.0	2024/5/14	5:00	6:00	1:00	2	1.0
2024/3/23	6:00	7:20	1:20	0	0.0	2024/5/16	6:15	6:45	0:30	1	1.0
2024/3/28	6:20	7:20	1:00	0	0.0	2024/5/18	4:40	5:40	1:00	1	0.5
2024/3/30	14:20	15:20	1:00	44	22.0	2024/5/22	5:30	6:30	1:00	0	0.0
2024/3/31	9:00	10:00	1:00	1	0.5	2024/5/24	5:50	6:50	1:00	108	54.0
						2024/5/25	5:30	6:30	1:00	0	0.0
						2024/5/28	6:00	7:00	1:00	0	0.0
						2024/5/31	6:10	7:10	1:00	0	0.0

春の渡りピーク

春の初山別村では、ほかの時期と比較して 4 月上旬に多くのミツユビカモメが記録されました（表 1、写真 1）。この時期には、沿岸域を羽ばたき飛翔で北へ移動する個体が次々と観察され、これは渡りによる移動であると思われました。また、3 月にもやや多くの個体が記録されました（写真 2）。



写真 1. ミツユビカモメの群れ(2024 年 4 月 2 日撮影)



写真 2. ミツユビカモメの群れ(2024 年 3 月 30 日撮影)

個体数が多く記録された 3 月 2 日は時化模様、3 月 14 日は西風がやや強い条件であったことから、この時は沖合に分布していた個体が強い波風の影響を受けて沿岸に寄せられた印象を受けています。

このほかに、5 月 24 日にも 104 羽が

記録されましたが、この日に観察された個体は尾羽の先端に黒帯がある幼鳥のみでした。齢別に個体数を数えていないため正確なことは言えませんが、4 月上旬の渡りピーク時には成鳥の個体数が多い印象で、繁殖に参加しない幼鳥は成鳥よりもゆるりと北上するのかもしれませんが。

周辺地域での記録と比較してみると、春の利礼航路では 4 月中旬に本種の個体数のピークがみられています（杉村 2004）。また、過去に初山別村の沖合で通年にわたって行われた船上センサスでは、3 月と 10 月の調査回で計 17 羽が確認されています（長谷部 2020）。

今回の観察では 3 月からミツユビカモメが確認され、4 月上旬に最も多くの個体が記録された後、4 月 11 日を過ぎると確認個体数が減少しました。既存の知見と今回の観察結果から、日本海北部における本種の春の渡り時期は、主に 3 月から 4 月頃と考えられ、4 月上旬～中旬が渡り時期のピークと想定されます。

おわりに

ところで、ミツユビカモメについて色々と調べてみると、本種は国際自然保護連合（IUCN）のレッドリストで危急種（VU）として選定されている（IUCN オンライン）ことを知りました。これは、過去 3 世代（39 年間）における世界的な個体数減少が 30～49%の範囲にあることが選定根拠となっており、個体数減少の要因には餌資源の減少や油汚染による影響が指摘されています（IUCN オンライン）。国内でも、オホーツク海で行われた長期的な調査結果により、本種の観察個体数の減少が報告されており（渡辺 2022）、本種の動向については今後も注視する必要があるようです。

引用文献

長谷部真（2020）初山別沖海鳥調査．北の海鳥 11:14-20.

International Union for Conservation of Nature and Natural Resources（オンライン）The IUCN Red List of Threatened Species: Black-legged Kittiwake *Rissa tridactyla* published in 2018.

<https://www.iucnredlist.org/species/22694497/155617539>.（参照

日：2025年8月30日）.

杉村直樹（2004）利礼航路で観察された鳥類および海棲哺乳類．利尻研究 23:93-128.

矢萩樹（2024）初山別の海鳥 1～晩冬から早春に見られるケイマフリ群～．北の海鳥 19:2-4.

渡辺義昭（2022）網走市能取岬 2010～2018年の海鳥の季節変化と個体数の減少．知床博物館研究報告 44:25-37.

天塩町振老沼

ハジロクロハラアジサシとの出会い

山下 政俊

深川市から苫小牧市に異動したことをきっかけに鳥見を始め、その後礼文島や天塩町など道北を中心に 10 年ほど住んでいたため、様々な珍しい鳥との出会いがありました。そのうち 2021 年 5 月 30 日に振老沼（天塩川旧河川）で出会った、ハジロクロハラアジサシの報告をいたします。

天塩町は、日本海側に面した天塩川の河口の町であり、天塩川はこの振老地区の少し先から流れを変え 8km ほど海岸と平行に南に流れ、日本海へと注ぎます。河口から 20km ほどは汽水域となり、この振老地区周辺は、日本海、天塩川の汽水域、振老沼の淡水域^{*1}やアカエゾマツの林、砂

丘林や内陸側の針広混交林など多様な環境がある場所です。その中でも振老沼は、天塩川の治水事業により取り残された三日月湖になります（図 1）。この周辺には春と秋、オオヒシクイやマガン、コハクチョウやオオハクチョウなどの渡り鳥の重要な中継地となっており、多い年には 1 万羽以上のヒシクイやマガンが、振老沼だけでなく、周辺の牧草地や沼地に集まり、羽を休め餌を採っています。この沼は、マガンやオオヒシクイの餌となるヒシが人間によって移植された^{*2}こともたくさんの渡り鳥が集まる理由の一つになっているかもしれません。さらに、アカエゾマツの林では、ほぼ毎年オジロワシの繁殖が確認されており、他にもチュウヒ、ハイイロチュウヒ、ケアシノスリなどの猛禽類も見られ、草原性の野鳥、水辺の野鳥など多種多様な野鳥がここでは見られます。



図 1 振老周辺

5 月 30 日は、天塩川堤防（天塩川とサロベツ川の合流地点。ここは知る人ぞ知るイトウの釣り場で全国から釣り人が集まる場所）から振老沼の方へ移動途中、同じ場所を行ったり来たり、降下し上昇し、水面すれすれを飛び、を繰り返す、ツバメよ

りもかなり大きい白黒の鳥が見えました（図 2）。見たことのない鳥だったので、慌ててカメラのシャッターを切りました。止まることはなさそうな感じだったので、なんとかブレずに撮れる写真があればと、しばらくシャッターを切っていました（そ

れでもきちんと写った写真はほぼありませんでした)。数枚の写真がなんとかまともに写ってくれていたのも、自宅に帰り図鑑と見比べ、羽の裏が黒であることが決め手となり、ハジロクロハラアジサシとわかりました。他の類似種のクロハラアジサシやハシグロクロハラアジサシなどとも比較的簡単に見分けられました。



図2 ハジロクロハラアジサシ

飛び方は、ツバメが何度も水面で水を飲むときの飛び方と似ていたと記憶しています。撮影中アジサシの仲間のような感じはしていましたが、そのときは種まではわかりませんでした。やはり初めて見る野鳥だと興奮しますね。自宅に戻る車中では、はやく図鑑で確認したいと、少しスピードを出していたかもしれません。



図3 クロハラアジサシ

ちなみに、天塩町内の鏡沼公園では、クロハラアジサシを2羽確認しています(図3)。このときはハジロクロハラアジサシとは違う顔つきだったので、こちらも図鑑で確認したところ、腹の灰色の部分の確認できたので、クロハラアジサシと確認できました。

先にも書きましたが、天塩町は、海から近く天塩川、その旧河川である三日月湖、牧草地、そしてアカエゾマツの林や針広混交林などの多様な環境が、小鳥類、ガンカモ類、そしてアジサシ類のような希少な海鳥などの様々な鳥類を呼び寄せる要因になっていると、この記事を書いて改めて思いました。そして、まだ天塩川が手つかずだった頃は、もっともっと豊かな湿原であったのだろう、と思いを馳せる今日この頃です。

※1 しじみの資源回復のため、現在は天塩川と接続され、ゆっくりと汽水化に向かっている。また、周辺には淡水の沼も点在している。

※2 振老沼の汽水化によってヒシがダメージを受けても大丈夫なように、隣に代償池をつくり、そこにヒシを移植した。

豊富町にハジロクロハラアジサシ
日本野鳥の会道北支部 川崎正大

私は 2025 年 5 月 29 日、豊富町サロベツ湿原の旧泥炭採掘跡において、ハジロクロハラアジサシ 3 羽を観察いたしましたのでご報告いたします。

○観察地点

観察地点は 1970 年代～2000 年代初等にかけてサロベツ湿原で行われていた泥炭採掘の跡地で現在も採掘水面が残され湖沼のような景観を作り出しています(図 1)。調査用の木道が敷設され通常は非公開エリアとなっていますが、春～秋の週末を中心に湿原再生事業などを伝えるガイドツアー(サロベツ湿原バックヤードツアー)が催行されている場所でもあります。



図 1 サロベツ湿原の泥炭採掘跡地
(Google Map 使用)

○観察時状況と周辺地域での記録

当日は前述のツアーに参加し水面に隣接した木道を通行中、前方で上空をヒラヒラと飛ぶアジサシ類 3 羽を確認し慌てて双眼鏡をのぞいてみたところ、3 羽共本種の成鳥夏羽のように見えました(図 2)。本種

の成鳥夏羽は 1) 頭部～体上下面、下雨覆が一様に黒色であること、2) 風切りと下尾筒が白色であることが特徴としてあげられます(真木ら 2014)。自宅に戻り画像を改めて確認したところ、これらの特徴が合致したため、今回観察できた個体も成鳥夏羽であると考えられます。



図 2 ハジロクロハラアジサシ

私は数年前まで、仕事上毎週のようにこの木道を使っていたのですが、ここでアジサシ類を見たのは初めてでしたし、まさか人生で初見であるハジロクロハラアジサシを同時に 3 羽も見られるとは予想もしていなかったので、大変驚いてしまいました。

なお、当研究会代表の長谷部氏が 5 月 23 日に町内の兜沼でもハジロクロハラアジサシを目撃しているため、今回観察できた群れの一部が同一であれば 23 日前後から周辺には飛来していたと思われます。

結局この群れは木道上の私達を意識してか、遠方へ飛去してしまい近い距離での観察は叶いませんでしたが、それでもツートンカラーのカッコいい姿を拝むことができ、私は一目惚れしてしまいました。

本種の北海道での状況を調べたところ、十勝川下流域や石狩川河口での記録が多いとされています(千嶋 2018)。一方道北地域に目を向けると、利尻島で 5 月と 9～

11月にそれぞれ記録があるほか(利尻島自然情報センター 2017), 近年では天塩町の振老沼でも5月に観察されています(日本野鳥の会道北支部 2021、本誌山下氏の記事)。今まではあまり意識していなかった種ではありますが、宗谷周辺でも少数ながら通過している可能性もあるかと思えますので、今後の渡り時期には注目していきたいと思えます。

○引用文献

真木広造, 大西敏一, 五百澤日丸 2014
決定版日本の野鳥 650. 平凡社, 東京.
利尻島自然情報センター 2017 利尻島の野鳥リスト 13.0
千嶋淳 2018 北海道の海鳥5 トウゾクカモメ類・アジサシ類, 道東海鳥研究所, 池田町.
日本野鳥の会道北支部 2021 オロロン: 45-1

道北日本海側におけるクロハラアジサシ・
ハジロクロハラアジサシの観察記録
当代表 長谷部 真

クロハラアジサシ *Chlidonias hybrida* は中国、中央アジア、ヨーロッパで繁殖し、アフリカ、東南アジア、オーストラリアで越冬しますが、アフリカ南部でも繁殖します(Gochfeld et al. 2020a). ハジロ

クロハラアジサシ *C. leucopterus* は中央アジア、中国北東部、ロシア東部で繁殖し、アフリカ、東南アジア、オーストラリアで越冬します(Gochfeld et al. 2020b). 国内ではクロハラアジサシ・ハジロクロハラアジサシともに旅鳥で、春から秋にかけて全国の干潟、埋め立て地の水溜まり、湖沼に飛来し、クロハラアジサシは南西諸島で多いとされています(桐原ほか 2000).

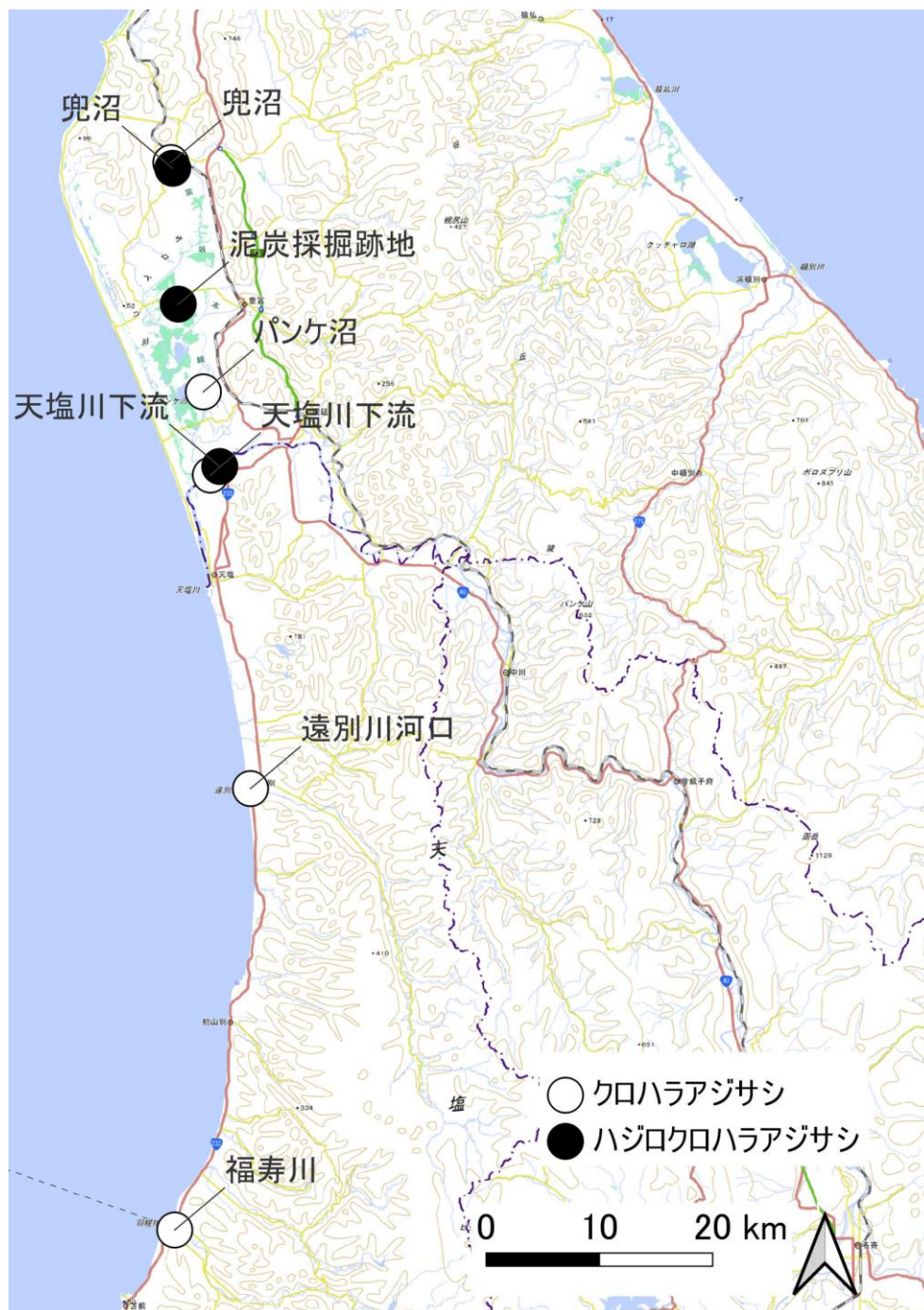


図1 クロハラアジサシ・ハジロクロハラアジサシの観察地点(情報含む)

私が初めてクロハラアジサシに出会ったのは2012年10月15日でした
[\(https://seabirds.exblog.jp/18069590/\)](https://seabirds.exblog.jp/18069590/)。当時働いていた北海道海鳥センターの裏を流れる福寿川（旧羽幌川）の上を「カモメとはちょっと違う鳥」が飛び回っていました（図1，図2）。慌てて窓を開けて写真を撮り図鑑で種を確認するとクロハラアジサシの冬羽に換羽中の成鳥であることがわかりました。その日は西風が強くこの秋初めての冬のような天気でしたので，西風に流されて沖合から沿岸部に入って来たかもしれません。クロハラアジサシは，2013年7月3日

[\(https://seabirds.exblog.jp/19995026/\)](https://seabirds.exblog.jp/19995026/)，2013年9月2日に
[\(https://seabirds.exblog.jp/20421069/\)](https://seabirds.exblog.jp/20421069/) 黒田宏章氏により遠別川河口部でも確認されています。



図2 クロハラアジサシ冬羽に換羽中の成鳥 2012年10月15日 羽幌町

	
2020年6月10日 天塩川下流	2021年5月21日 兜沼
	
2022年7月17日にパンケ沼	2023年6月11日 兜沼

図3 サロベツで確認されたクロハラアジサシ

さらに、サロベツに引っ越してから2020年6月10日に天塩川下流、2021年5月21日と2023年6月11日に兜沼、2022年7月17日にパンケ沼で、それぞれ沼または川の上空をいずれもクロハラアジサシの成鳥が飛び回っているのを確認しました(図3)。2020年は初めての成鳥夏羽の確認だったので興奮しましたが、その後あちこちで毎年出てきたので、よく観察すればと毎年どこかに飛来していたのかもしれない。



図4 ハジロクロハラアジサシ 2025年5月23日 兜沼

2025年に札幌に引っ越してから仕事で5月23日にサロベツに行く機会がありました。仕事は9時からでしたので、豊富町の宿から山方向に鳥観察に向かったところ、意外とあっさりと終わってしまったので、方向転換し森林の鳥も水鳥も草原の鳥も観察できるサロベツ随一の探鳥地である兜沼に向かいました。小鳥は期待外れだったので、湖畔でカンムリカイツブリなどを見ていると遠くでアジサシっぽいのが飛び回っているのが見えました(図4)。またクロハラアジサシかなと双眼鏡で見るとカササギのように体色の白黒の差が大きいのがわかりました。きっとまだ観察したことのないアジサシの仲間に違いないと確信しまし

たが、なにしろ遠いのでまともな写真がとれないまま仕事に行く時間が来てしまいました。家に戻って不鮮明な写真を図鑑に照らし合わせるとハジロクロハラアジサシの成鳥であることがわかりました。

その6日後の5月29日に川崎正大さんよりサロベツ湿原の泥炭採掘跡地でハジロクロハラアジサシ3羽を見たとの情報が来ました(本誌参照)。自分の写真はとても人様に見せられる代物ではなかったので、川崎さんに記事をお願いしました。さらに日本野鳥の会道北支部の会員・天塩町在住の天塩高校教員で振老沼やサロベツ湿原センターで野鳥観察や湿原の総合学習をしていた山下政俊さんから「異動のため札幌へ引っ越します」というお別れの挨拶文のメールが偶然目に入りました。「ここ天塩においては、サバクヒタキ、ハジロクロハラアジサシなどめったに見られない鳥を見られたことは幸せでした。」と記載されていました。山下さんがハジロクロハラアジサシを観察していたとは気づいていなかったもので、すぐに日本野鳥の会道北支部の会報誌「オロロン」確認してみると確かに観察した写真が載っていました(日本野鳥の会道北支部2021)。急遽、山下さんに連絡し記事をお願いしました(本誌参照)。結局自分もハジロクロハラアジサシだけでなく、クロハラアジサシも合わせてこの記事を書くことにしました。

日本鳥類目録改訂第8版では北海道でクロハラアジサシは中部・北部・東部では「年によって記録あり(IV)」, 南部で「偶発的な記録のみ(AV)」, ハジロクロハラアジサシは中部・東部では「年によって記録あり(IV)」, 北部・南部で「偶発的な記録のみ(AV)」とされており(日本鳥学会2024), 北海道鳥類目録と北海道野鳥図鑑ではクロハラアジサシが「迷鳥」, ハジロクロハラアジサシが「まれな旅鳥」とさ

れています（極東鳥類研究会 2012 河井ほか 2003）。利尻島では5月と9月にクロハラアジサシ、5月、9–11月にハジロクロハラアジサシの記録があり（利尻島自然情報センター 2017）、天売島では5月にクロハラアジサシの記録がありました（寺沢 2018）。

これらの文献を合わせると北海道では両種ともに毎年ではないものの、5月から11月くらいまでに散発的に観察され、どちらかというハジロクロハラアジサシのほうがクロハラアジサシより観察機会が多い印象です。今回報告した道北の日本海側沿岸に限っては、クロハラアジサシのほうが観察機会が多く、ハジロクロハラアジサシのほうが少ないようです。アジサシ *Sterna hirundo* はほぼ海上でしか見たことがないですが、両種はやや内陸の沼や川に現れるのが特徴です。今後も両種の出現状況を注視していきます。

文献

河井大輔・川崎康弘・島田明英・諸橋淳
2003 北海道野鳥図鑑。亜璃西社、札幌市。

Gochfeld, M., J. Burger, G. M. Kirwan, and E. Garcia 2020a. Whiskered Tern (*Chlidonias hybrida*), version

1.0. In Birds of the World (J del Hoyo, A Elliott, J Sargatal, DA Christie and E de Juana Eds). Cornell Lab of Ornithology, Ithaca, NY, USA.

Gochfeld M, J Burger, DA Christie GM Kirwan & E Garcia 2020b White-winged Tern (*Chlidonias leucopterus*), version 1.0. In Birds of the World (J del Hoyo, A Elliott, J Sargatal, DA Christie and E de Juana Eds). Cornell Lab of Ornithology, Ithaca, NY, USA

桐原政志・山形則男・吉野俊幸 2000 日本の鳥 550 水辺の鳥。文一総合出版。東京都。

日本鳥学会 2024 日本鳥類目録改訂第8版。日本鳥学会、東京。

日本野鳥の会道北支部 2021 オロロン 47-1.

利尻島自然情報センター 2017 利尻島の野鳥リスト version13.0. <https://riishiri.sakura.ne.jp/Sites/Birds/list/birdsv13.pdf>

極東鳥類研究会 2012 北海道鳥類目録改訂4版 極東鳥類研究会、美唄市

寺沢孝毅 2018 天売島鳥類目録 天売島における鳥類の月別記録。

編集後記

今回は久しぶりに8件の記事になりました。最近は4-6件だったので、1号・2号以来の記事の多さでした。初期の頃とは異なり、3名の編集委員が内容を確認しますので、著者とのやりとりでどの記事がどのくらい確認・修正されているのか途中でわからなくなってしまうこともありました。

記事の中身はオオセグロカモメの生態についてが一件の他、フェリー航路上や陸上からの沖を眺めた渡り海鳥調査や珍鳥海鳥の観察記録でした。フェリー航路が少ない北海道で航路調査や陸上からの観察が勢力的に実施されていることは大変喜ばしいことで、毎回勉強させていただきながら記事を読んでいます。今後も海鳥の渡り状況が明らかになっていくことを期待します。

一方で、本誌は元々会の活動として礼文島における海鳥調査報告や北海道の小規模

海鳥繁殖地における調査記録などの報告の受け皿として始めたものです。このため、北海道の海鳥の繁殖記録やその生態の記事も歓迎します。

次号は2026年の2月頃に発行予定です。原稿の執筆のご連絡は下記までお願いします。

hasebemakoto@hotmail.com（長谷部）

masayukisenzaki@gmail.com（先崎）

larus.gull.0415@gmail.com（矢萩）

北海道海鳥保全研究会は現在ほぼ会報誌の発行だけが活動となっています。「北の海鳥」は私、長谷部と事務局長の先崎さん、広報担当の矢萩さんの3名で運営しています。原稿の細かい部分まで確認していますがよりよい会報誌にするためですので、面倒をおかけしますがご理解の程よろしくお願いします。

北海道海鳥保全研究会 編 会報誌 北の海鳥第二十一号 発行日 令和7年10月31日 発行所 札幌市西区発寒7条14-8-2
--